

# 26PB-am230

4年制薬学生の“科学的に考える力”の醸成—グループ討議によるアプローチ  
○阿部 芳廣<sup>1</sup>, 鈴木 岳之<sup>1</sup>, 永井 総子<sup>1</sup>, 権田 良子<sup>1</sup>, 植村 良太郎<sup>1</sup>, 井上 賀絵<sup>1</sup>,  
石川 さと子<sup>1</sup>, 横田 恵理子<sup>1</sup> (慶應大薬)

【目的】薬学教育モデル・コアカリキュラムによる6年制薬学教育のアウトカムが設定されたが、4年制の学生の資質は、全国的に検討不足である。今回、4年制の学生の1年生を対象とした授業において、「研究能力」醸成を目的として“考える力”をグループ討議 (SGD) によって行う方法について試みた結果を報告する。

【方法】慶應義塾大学薬学部薬科学科 (4年制) 1年生 67名を対象とし、必修科目である「薬科学概論」のうち90分2コマを利用した授業をSGD方式で行った。『「コーヒーを飲むと頭が冴える」ことを科学的に証明するには?』をテーマとし、授業の最初に「科学的根拠に基づく証明とは、仮説とその実証である」という簡単な説明と、SGDのルールを説明し、その後、6~7名を1グループとして「コーヒーを飲むと頭が冴える」ことを科学的に証明するために、具体的にどのような方法をとったらよいか、について、90分のSGDを行った。授業前後に自由記述式のアンケートを行い、記載された単語の解析から授業の効果を検討した。

【結果と考察】SGDで抽出された「科学的に証明する」ために行うべきことは、①頭が冴えることの定義、②有効成分の分析、③カフェインの効果に関する対照実験、④精神的な影響の排除、などに大別された。これは、事前に仮説を立てて実証することという説明が影響したと考えられる。事前アンケートでは、SGDに対して「難しそう」、「面倒くさい」などのネガティブなイメージをもつ学生が多かったが、SGD後は65%の学生のイメージが変化し、「想像より楽しかった」などと回答し、意見の多様性に気付いたという意見も出された。今回の授業を通して多くの学生が科学的に考えることの重要性を実感した結果が得られ、4年制の学生の研究マインドの醸成に積極的にSGDを活用すべきであることが示唆された。